

はたちの喜び 自覚そして感謝の気持ち

新成人 一五七名

好天に恵まれた一月十五日、町民会館で成人祝賀式が行われ一五七名の若人が大人の仲間入りをしました。

成人者の中から四名の方が学生として、社会人として、それぞれ違った立場から、「はたちの決意」を発表しました。会場に集った新成人も真剣な表情で

聞き入っていました。

懇談の時間では、会場のあちらこちらに、久しぶりに会った友と互いに成人になった喜びを分かち合う姿が見受けられ、会場は和やかなふんい気に包まれていました。



二又 鈴木 正雄さん

二十歳になって 思うこと

いよいよ自分も二十歳になり、成人式を迎えることになったのですが、何か「アツ」という間に二十年が過ぎてしまったような気がします。何年か前までは、二十歳といえはもうすっかり一人前の大人だと思っていました。が、いざ自分になってみると、まだまだ一人前にはほど遠いような気がします。

しかし、こうして成人となつたわけですから、自分に対する

責任、大人としての義務、そして社会人としての自覚を持たなければなりません。この二十歳を一つの節目として、今までの甘い考えを早く捨て、本当の意味での成人になりたいと思えます。そう思っても、すぐ明日からというわけにはいきませんが、自分の中で気持ちを切り換え、徐々にでもいいから一人の大人としてどんどん成長していきたいと思えます。

将来のことはまだわかりませんが、できれば、ただ毎日を通していくのではなく、何か一つ「自分はこうなのだ」というものを持ち、また何か重みのある深い人間になれたら最高だと思います。

最後に、今までお世話になった両親、先生方、そして町内の方がた、本当にありがとうございました。



虫生 深田あけみさん

二十歳を 迎えて

二十歳を振り返ってみて、思い出の一つ一つを手繰り寄せていくと、子供の時、熊の縫いぐるみがないと泣き止まなかったとか、あの毛布がないと眠れなかったといった経験を、どなたでも一つや二つは持つていらっしやることと思います。今では、何でこんなものにこだわったのだろうって思えるほど、他のそれと大して変わっている訳ではありません。それでもその時には、それが絶対的存在だったのです。

二十歳となった現在、その純粋な気持ちをどれだけ持ち続けているのでしょうか。かわいいものを見て、正直にかわいいと口に出して言える、素直な気持ちを忘れてはいませんか。器用な生き方を覚えた代わりに、子供の心を置き去りにしてしまっただけな気がします。日常の中には、たくさん感動する場面が隠れています。ただ足早に通り過ぎてしまつて、それに気がつかな



いだけなのです。煙草屋さんの看板が替わったことにも気づかず、目を伏せ歩いていたのでは、楽しくないではありませんか。空が晴れていることも、雨上がりの空気が澄みきっていることにも気がつかずに、生活してはいませんか。さいいなことが、一生を左右するということもあります。私は、もう一度自分の生活に目を向け、日常の中に隠れている、非日常なことを一つでも余計に見つけ出し、それら様々な物語に感動する気持ちを大切にしたいと思っています。そして、それらを自分の身に取り入れて、心のポケットをいっぱいになりたいと思います。

文末になりましたが、健康な体を与えてくれ育ててくれた両親、暖かく見守ってきて下さった方がたに心から感謝いたします。